第７章　まとめ

第１節　中近世墓群の考古学的考察

Ⅰ．中近世墓群の変遷と特質

既に見てきたように、Ｇ区西縁部で検出した中近世墓群は187基（墓２～墓188）の墓で構成され、中世後期後葉から近代にかけて形成されたものと判明した。極めて長期間にわたって墓域として利用され続けるなかで、葬法が時期的に変化している。そこで、まず本墓群の時期的変遷を整理し、遺構形態や埋葬方法の変遷を確認しておくことにする。

１．中近世墓群の形成過程

第５章では墓を「中世墓」と「近世墓」に大別したが、ここではこれを踏まえた上で、あらためて時期を設定していく。特に、「近世墓」としたものは造営時期の幅が広いため細分する。

「中世墓」は16世紀から17世紀前葉にかけてつくられたと考えられる。これらは立地や特徴が異なるいくつかの小群で構成されているので、時期的に細分が可能と考えられる。しかし、副葬品は渡来銭のみで構成される銭貨を中心としており、土器・陶磁器類を伴う墓が少ないこともあって、伴出遺物での時期決定は困難である。しかも、墓出土の土器類はほぼ同時期のものしか見られず、土器出土の墓同士についても時期的な前後関係を明らかにすることは難しい。そのため、細分の余地を残すものの、これらの「中世墓」が営まれた時期をひとつの段階と捉えてⅠ期としておく。

表５　近世墓の切り合いの新旧

新しい土壙類型

古い土壙類型	A	B	C	D
A		11	11	3
B	4		13	2
C	1	3		1
D	1	1	2	

「近世墓」は17世紀中葉から近代にかけてつくられたと考えられる。時間幅が広く、また墓の特徴も変化しているので時期的に区分可能である。そこで、まず第５章で示した「Ａ類墓→Ｂ類墓→Ｃ（＋Ｄ）類墓」という変遷を切り合い関係で再確認してみよう（図340・表５）。大枠では先の想定と大きくは変わらないが、例外がいくつか見られる。特に、Ａ類がＢ類を切る例が４例見られ、逆転した関係となる割合がやや高い。それでも、全体としてみれば、Ａ類に古いものが多く、次いでＢ類が古く、Ｃ（・Ｄ）類が新しいという相対的な流れは押さえられるだろう。

この相対的な関係を出土遺物の年代で確認すると（表８）、Ａ類・Ｂ類よりＣ・Ｄ類（特にＣ類）は遺物の年代においても新しいことが分かる。一方、Ａ類の大部分とＢ類は明確に新旧の年代差をもつわけではなく、大きな時期差はないといえる。ただし、Ａ類の一部には出土遺物や切り合い関係から見て、これらより古く位置づけうる可能性のあるものが含まれている。こうした相対的な前後関係や遺物などの年代をもとに、次の３つの段階を設定した。

Ⅱ期：Ａ類のうち古い年代を示す一部の墓が形成される時期で、17世紀中葉から18世紀前葉ごろ。この時期に帰属することが確実な墓はないものの、その可能性が考えられる墓が数基みられる。

Ⅲ期：Ⅰ・Ⅱ期以外のＡ類墓およびＢ類墓が主体となる時期で、おおよそ18世紀中葉から18世紀後葉までにあたる。この時期幅の中でもＡ類がＢ類より相対的に古い場合が多いようである。

Ⅳ期：Ｃ（・Ｄ）類墓が主体となる時期で、おおよそ19世紀代にあたる。

では、この時期区分をもとに、中近世墓群の形成過程を確認してみよう。Ⅰ期は丘陵斜面部の１群、

平坦面の２群の大きく二つの群に分かれて墓が展開する。数の上では37基を確認した１群のほうが多く、この時期の中心的な墓域となっている。２群には、Ｇ３区にまとまった数の墓があるほか、Ｇ４区では確認した以外にⅡ期以降の墓に壊された墓がある程度の数存在していた可能性がある。１群は地形に沿って列状に並び、２群はほぼ同じ軸方向の墓がある程度の間隔を保って配されており、いずれも以前につくった墓との位置関係を意識し、墓域を徐々に拡大しながら展開しているようである。Ⅱ期は墓群の形成が極めて低調で、この時期に属する可能性のある墓は数基のみで、墓の立地はＧ４区に限られている。続くⅢ期には70基以上の墓がつくられる。Ⅰ・Ⅱ期と異なり、墓はＧ４区に密集しており、頻繁に切り合いながら展開する。こうしたあり方から、この時期にはこれまでの墓域が再編されて、Ｇ４区に新たな墓域が画定したものと考えられる。Ｇ４区を囲む区画溝もこの時期に墓域の再編に伴って形成されたと考えられよう。最終段階のⅣ期は、Ⅲ期から継続する墓域に30基以上の墓がつくられる。その展開の仕方はⅢ期と大きくは変わらない。

このように、本中近世墓群はⅠ期に丘陵斜面部を中心に形成が始まり、Ⅱ期に一旦墓の造営数が著しく減少する。続くⅢ期には、一転して墓の造営数が増大するとともに区画を伴う墓域が新たに設けられ、Ⅳ期もこの墓域内での墓の造営が継続するという過程をたどっている。墓群形成過程の上では形成開始期のⅠ期と、墓域再編期のⅢ期の始まりに大きな画期が見出せよう。

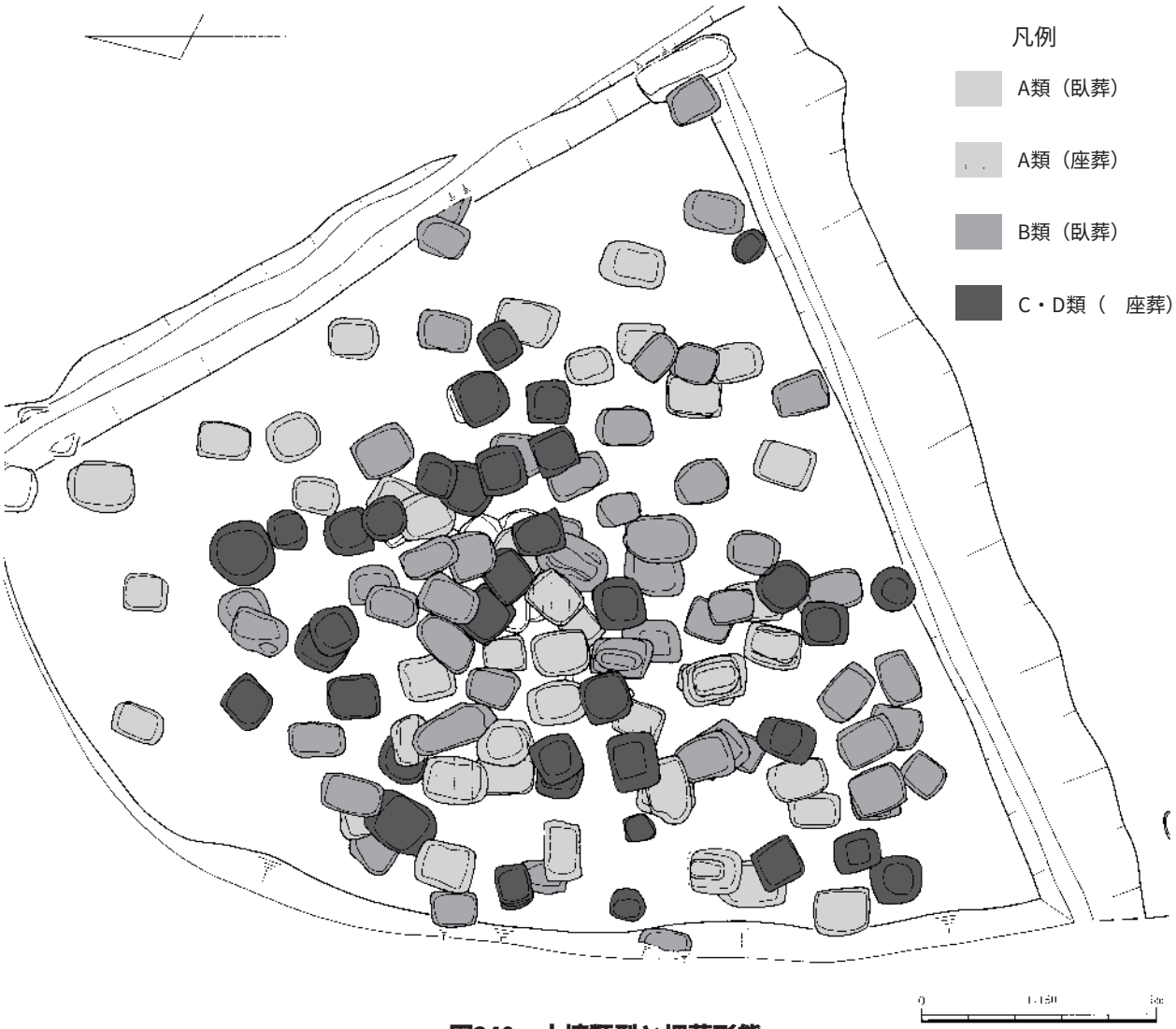

図340　土壙類型と埋葬形態

２．土壙形態と埋葬方法の変遷

続いて、時期ごとに葬法に関わる遺構の特徴を整理し、その変遷をたどってみたい。

Ⅰ期の墓は、ほとんどが土壙の上面から上層にかけて標石を伴う、いわゆる「集石墓」である。土壙形態は近世墓の土壙類型（p.85参照）を適用するとほとんどがA類となる。１群では、火葬骨出土の墓27を除き人骨は出土していないが、２群ではいくつかの墓から土葬された人骨が見つかっている。土壙の形態を考慮すると両群ともほぼすべてが土葬墓であったと考えられる。人骨の残る墓では遺体の埋葬形態はいずれも北頭位の臥葬で、その他の墓でも土壙の形態から考えて北頭位の臥葬をとっていた可能性が高い。棺の使用は少なくとも釘が出土した墓については確認でき、さらに、釘が出土していない墓でも遺物や礫の出土状況が棺の存在を推測させるような場合が見られるため、組み合わせ式の木棺などの使用も考えられるだろう。一方で、棺の使用を想定しがたい不整形で小ぶりな土壙もあるため、直葬のものも存在した可能性が高い。

Ⅱ期の可能性のある墓も、墓の上面には標石が見られ、土壙形態はA類を基本とする。土葬された人骨がいくつかの墓から見つかっており、遺体の埋葬形態が北頭位の臥葬と判明したものが１例のみ見られる。不明な点が多いものの、この段階も埋葬形態は臥葬をとっていた可能性が高い。

Ⅲ期は帰属する墓が多いこともあり土壙形態や埋葬方法にバリエーションが見られる。標石は前段階までと同様、ほとんどの墓に伴う。土壙形態は、例外的にC類・D類がわずかに見られるが、A類・B類が主体となる。遺体はすべて土葬されており、その埋葬形態は９割以上が北頭位の臥葬であるが、わずかに座葬も加わる。棺の使用の有無は、墓から釘が出土していなくても棺材と思われる木片や木質が遺物に付着している例がかなり多く見られるので、釘の出土のみでは判断できない。

Ⅳ期はⅢ期に比して墓の特徴が単相化する。前段階までに引き続いて、墓上面には標石が伴う。土壙形態はC類が中心になり、これにD類が加わる。ほかに、A類・B類も例外的に見られる。遺体はすべて土葬で、埋葬形態は９割までが座葬をとる。この段階ではまとまった数の釘が出土する墓の割合が高く、半数近くの墓は釘を用いた棺を使っていたようである。釘の出土がないものについても、前段階までと同様、棺が使用された可能性があろう。

表６　墓の特徴の変遷

	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期
標石	○	○	○	○
土壙形態	A	A	A・B	C
埋葬形態	臥葬	臥葬	臥葬	座葬

以上のように時期ごとに整理してきたが、墓の特徴には、時期によって変化する要素と変化しない要素が見られる（表６）。

遺構形態では、土壙上面に標石を伴うという特徴は一貫して継続する。一方、いくらか変化を見せる土壙形態は、Ⅰ期からⅢ期までA類土壙が用いられ、Ⅲ期にはこれにB類が加わる。土壙の深さの変化の理由は不明だが、Ⅲ期までは臥葬に対応した長方形の土壙が用いられており、大きな変化はなく連続する。Ⅳ期には座葬の普遍化に伴って、座棺に対応したC類やD類といった土壙形態となる。Ⅳ期での変化の主体は埋葬形態にあって、土壙形態はそれに従っている。そのため、大きく見れば、遺構自体の形態は大きくは変化していないとも考えられよう。つまり、遺体を土葬にするために土壙を掘り、その上面に標石を組むという墓構築の流れはⅠ期からⅣ期まで変化していない。

なかでも土壙上に礫集積を行うという点は一切変化せず、本墓群を顕著に特徴づけている要素である。こうした礫集積は「標石」と呼称してきたが、その役割は「墓じるし」ではなく、埋葬された死者の身体と死霊をともに封鎖することなどを目的とした「墓上施設」（岩田2003）のひとつであった可能性が高い(註1)。石塔建立が一般化して以降、むしろ遺体埋葬地点上の目印という意味合いに変容

していった可能性もあろうが(註2)、その意味づけのされ方に関わらず、中世以降、近世・近代までこの墓上施設を用い続けるという継続性自体が重要であろう。中世末葉の段階で採用されていた「集石墓」という形式が、近世以降も本墓群の造営集団の葬送習俗として踏襲され、形式化されていったと考えられる。

遺体の処理方法も一貫して土葬を採用しているという点では変化はない。なお、Ⅰ期にみられた火葬墓１基とＧ４区立石１周辺の火葬骨集積（時期不明）の存在は例外的ながら遺体の処理・埋葬方法を考える上で重要な例であろう。しかし、これら以外に火葬墓は確認できないので、Ⅰ期のうちに土葬に集約されたようである。

土葬される遺体の埋葬形態はⅠ期からⅢ期までは北頭位の臥葬が主体となる。興味深いのは臥葬にいくつかのバリエーションが見られる点である。Ⅰ期・Ⅱ期にこうした多様性があったかどうかは不明だが、埋葬形態の詳細が判明したⅢ期では、右側臥屈葬20例、左側臥屈葬１例、仰臥屈葬９例、伏臥屈葬９例となり、右側臥屈葬を主体としながらも仰臥屈葬や伏臥屈葬をとる墓も決して少ない数ではないことが分かる。このことから、遺体の埋葬形態には厳密な形式性が求められていなかった可能性が考えられよう。直葬墓、木棺墓両者が混在していた可能性があることや、棺形態にいくつかのバリエーションがあったと推測されることも、埋葬方法が厳密に形式化されていなかったことを示しているといえる。

続くⅣ期になると座葬が圧倒的に主体となる。ただし、Ⅲ期とⅣ期を年代上明確に区分できているわけではないので、ある時期を境に一挙に埋葬方法が転換したとは言い切れない。実際、座葬の初現はⅢ期にみられるので、18世紀後葉以降、徐々に座葬が採用されるようになったと考えることも可能である。いずれにしても、少なくとも19世紀代にはほぼすべての墓で座葬が採用されるようになったことは間違いないだろう。こうした、臥葬から座葬への変化は本墓群の展開においてひとつの画期と考えられるだろう。この埋葬形態の変化は、土壙の形態、棺の形式など考古学的に観察できる要素を変化させ、さらには葬送儀礼の過程にも変化を生じさせたと想定できよう。

３．周辺地域の近世墓調査例

以上のように本墓群の特徴をまとめてきたが、その特徴を周辺地域での近世墓の調査例と比較してみよう。山陰での近世墓の調査事例は少なく、十分な資料がそろっていないが、鳥取県西部の米子市陰田古墓群（杉谷ほか1984）、旧会見町田住桶川遺跡（北浦・中森ほか1997）と、島根県東部の安来市清水大日堂裏古墓（三宅ほか1998）、旧玉湯町半坂古墓群（柳浦・勝部ほか2006）と比較してみる。

まず、墓群の形成過程を遺跡ごとに概観してみよう。陰田古墓群ではいくつかの墓域で、増減がありながら、中世後期から近代初期まで墓が造営される。中世末から近世初期にかけてと、18世紀から近代初期にかけての墓の数が多いが、それぞれ墓域は大きく異なっている。なかでも、18世紀（特に後半）以降に形成されるＢ群は、新たに墓域を画定しており、狭い範囲に38基の墓が密集している。田住桶川遺跡は形成開始期が18世紀はじめごろで、19世紀初めにはその造営が終了しているようである。ここでも、18世紀後半に区画を伴って墓域が再編されているが、両者の墓域の位置的な関係は大きくは変化していない。清水大日堂裏古墓の形成開始は中世（時期的に隔絶する古代以前は除く）に遡るが、明確な時期は不明である。その中心となる時期は18世紀代で「ＡⅠ区西方」の造成を伴う墓域内に80基の墓が整然と密に並んでおり、それ以前の墓の分布のありようと大きく異なる。半坂古墓群は例外的なものを除いて中世末～近世初頭に墓が形成され始め、18世紀後半に墓の数が顕著に増加

している。ここでも、明瞭ではないものの、墓の増加期に墓域の形態に変化が見られる。

こうして見てみると、墓群の形成と展開には共通点が多いことが指摘できる。その形成期が門前第２遺跡と同じく中世末～近世初頭に遡るのが、陰田古墓群と半坂古墓群である。いずれもこれより古い段階の墓を少数ながら含んでいるが、中世末～近世初頭に墓の数が増え、墓群が新たに形成され始めていると考えられる。また、門前第２遺跡で見られたような18世紀後半での墓の急激な増加と墓地の再編という現象は、ほぼすべての遺跡に当てはまる。このような共通性の高い現象には、共通の社会的な背景を考えておく必要があるだろう。

続いて墓の形態や遺体の埋葬方法をみてみよう。陰田古墓群では中世後期が土坑墓、中世末～近世初頭が荼毘墓、近世前期は土坑墓、近世中期以降は座葬墓である。近世中期以降には石塔を伴う墓が見られるほか、墓上に石組みや集石をもつ墓も少数あり、小マウンドをもつ墓もある。田住桶川遺跡は18世紀前半代が一部に石塔を伴う座葬（？）墓、18世紀後半代が墓上に大型礫をもつ座葬墓である。清水大日堂裏古墓は中世には多様な遺構形態と葬法が確認できるが、中心となる近世墓のほとんどは平面形が正方形・方形で極めて深い墓壙をもつ座葬墓で、比較的古い段階から座葬がとられている。半坂古墓群は、中世末～近世初頭の墓には五輪塔や宝篋印塔が伴っていた可能性があり、18世紀後半以降の墓には石塔が伴っていたようである。埋葬形態は不明なものが多いが、18世紀後半以降の墓では臥葬、座葬の両者が見られる。

以上のことから、近世には土葬が一般的であるが、遺体の埋葬形態には特に共通性は見られず、墓上施設なども含めた墓の形態もそれぞれかなり個別的であることが分かる。共通性を積極的に抽出することも可能だが、それよりも個々の墓群が個別的な変遷を遂げているので、まずはそれぞれの変遷のあり方とその意味を跡付けていくことが重要であろう。したがって、ここでは各墓群の個別性の強さを確認するにとどめておこう。

このように、個々の墓群にはある程度の共通性が見られる一方で、個別的な特殊性も著しい。近世の墓制が、それぞれの地域社会において個別的な形態をとっていたことは容易に想像でき、またその主体となった地域社会の展開も一様ではなかったと考えられる。資料が増加すれば、山陰での近世墓制の一般性が明らかになるのかもしれないが、それよりもそれぞれの墓制の特殊性を個別地域の歴史のなかで評価することが重要だろう。墓群の形成・展開のあり方において見られた共通性も、こうした個別地域史の解明抜きには単なる現象の類似としてでしか捉えることができないだろう。　（北）

Ⅱ．両墓的景観の形成と造営主体

１．遺跡周辺の石塔と「両墓制」

これまで確認してきたように本墓域内には石塔が見られない。石塔の普及時期から考えて、本墓群の継続期間内には石塔建立が一般化していたはずであり、近世から近代にわたる長期間、石塔を用いる墓が１基もなかったとは考えにくい。こうしたことから、本墓群の造営に際しては、「両墓制」がとられていた可能性が考えられよう(註3)。この場合、石塔は「埋葬墓地」とは異なった場所に「石塔墓地」を設けて建立されることとなるが、現在周辺にこうしたものは見られない。

近世墓の墓域となっていたＧ４区は現門前集落の共有地で、古い「ステバカ」として認識されていたことから、この「埋葬墓地」は近代初期までは門前集落によって利用されていたと考えられる。したがって、この「埋葬墓地」に対応する「石塔墓地」は現門前集落の墓地にある石塔によって構成さ

れていた可能性が考えられよう。

現在、門前集落の各家が利用する墓地は、遺跡の同一丘陵上に６ヶ所が営まれており、このうち３ヶ所（遺跡から50mほど北に２ヶ所、300mほど北に１ヶ所）には近世に遡る石塔がみられる。これらの墓地は近代の墓を中心とし、墓地区画などは近年整備されたようである。近世の石塔は明らかに二次的に整理されており、別の場所から移設されてきたものと思われる。以下にこれらの石塔の概要を見てみよう(註4)。

近世の石塔は３つの墓地をあわせて30基ほどしかなく、当然、相当数が散逸してしまったと思われる。銘文の年号ごとに数を示すと、寛文１基、元禄１基、正徳１基、享保１基、元文２基、明和４基、安永２基、天明３基、寛政４基、文化２基、文政２基、天保３基、弘化２基、嘉永１基、安政２基、元治１基、慶応２基となる。これらを整理すると、17世紀後葉から18世紀前半までが６基、18世紀後半が13基、19世紀代（幕末まで）が15基となる。遺跡の中近世墓群の時期では、Ⅱ期に対応する石塔が一定量見られ、Ⅲ期以降に対応するものの数が多い。18世紀後半以降の石塔数の増加は、散逸した石塔に年代上のバイアスがなければ、その普及状況を示している可能性が高いと考えられる。

では、これらの石塔は本来どこに建立されていたのだろうか。これを明らかにすることは難しいが、門前上屋敷遺跡の２次調査で石塔が出土しているので（牧本ほか2007）、ひとつの手がかりとなろう。門前上屋敷遺跡で出土したのは自然石利用の石塔竿部６基、石塔台座７基で、紀年銘が判明したもののうち、最古のものが享保五年で、他は、明和、安永、天明、天保が各１基ずつであった。古いもので18世紀前葉、ほかは18世紀後半から19世紀前半までと、年代上のあり方は丘陵上の現在の墓地と同じである。出土状況からは、門前上屋敷遺跡の調査地内に建立されていたとは考えられないが、その近隣に石塔を立てた場所があったようである。この門前上屋敷遺跡とその周辺には近世に集落が形成されていたと考えられ、これが門前第２遺跡の墓群の造営主体であった可能性が極めて高い。こうした点を積極的に評価すれば、門前第２遺跡の「埋葬墓地」に対応する「石塔墓地」は門前上屋敷遺跡周辺の集落域付近に設けられていたと推定できよう(註5)。

このように、遺跡周辺で確認できた石塔の年代を見る限りでは、石塔の受容は17世紀後葉ごろに始まり、18世紀後半以降にはかなり普及していたと考えられよう。このことから、門前第２遺跡および門前上屋敷遺跡周辺での本格的な両墓的景観の成立は18世紀後半以降と考えられる。そしてこれが近代初期まで続き、明治期のうちにほぼ解体したものと考えられよう。

また、両墓的景観の成立を、門前第２遺跡での墓群の形成過程とあわせてみると、Ⅲ期での墓域の画定および墓の増加と期を同じくしていることが分かる。この現象が因果関係をもって起こっていたのかどうかは不明であるが、墓制上の画期をなすことは間違いない。前段階のⅡ期には墓の数は減少するが、皆無となることはなく、同時期の石塔も一定量見られる。この時期には、中心となる墓域が別の場所にあったか、墓域としては大きくまとまらず数箇所に分散していた可能性があろう(註6)。こうしたことから、両墓的景観の成立と期を同じくして埋葬地に再編が起こった可能性が考えられる。もちろん、それが意図的に行われたかどうかは不明である。いずれにしても重要なのは、結果として、画然とした共同埋葬地が形成され、両墓的景観が明瞭な形で顕在化したことにあろう。

「両墓制」は、「伝統的」墓制に仏教的な要素である石塔が付け加わる際に生じた墓地形態のひとつのバリアントであると考えられている（新谷1991など）。この石塔の建立は「家」の先祖祭祀を目的とした個人的な営為であり、「家」の社会的・経済的な成長にともなう現象であるとされる。こう

したことから、石塔は従来の葬送儀礼においては異質な存在で、埋葬は石塔普及以前と同じく共同体によって行われるが、石塔建立は「家」によって行われることになる。また、埋葬にかかわる民俗事象（たとえば墓上施設）には仏教的要素が浸透してこないことが指摘されており（岩田2003)、「伝統的」な墓制を継続する共同体的な規制が大きく働いていたと考えられよう。つまり、埋葬とそれにかかわる葬送儀礼は「伝統」にのっとって共同体が行い、一方の石塔建立は、仏教的要素と結合した先祖祭祀の主体である「家」が行っていた。死者祭祀におけるこの二つの主体、共同体と「家」の間での矛盾を回避する役割を担ったのが「両墓制」という墓地形態だと考えられる（白石2004)。

すでに確認したように、門前第２遺跡中近世墓群はその「伝統的」な墓制を長期間にわたって継続させていると言える。これは端的に共同体的な「伝統」の強さや、「家」に対する共同体的規制の大きさを示しているだろう。こうした共同体の影響力の大きさが、石塔受容時に本墓群が「両墓制」化した理由のひとつと考えられよう。

このように、「両墓制」とは墓制における共同体と「家」の間の矛盾の回避策であったと考えられるものの、この墓制が二つの主体間の矛盾を解消する方向には作用していないのではないかと思われる。たとえば、門前第２遺跡ではⅢ期の石塔普及期に埋葬地が再編されたことで、むしろ、葬送儀礼に関する共同体のコミットメントが強まったかのような様相を呈している。したがって、石塔建立の裁量権は「家」がもつ一方で、共同体が埋葬の場における主体性を低下させることは決してなかったといえよう。こうした共同体の主体性の持続こそが、「両墓制」と呼びうるまでにその墓地構成を固定化させていき、近代初期までこれを残存させた要因であっただろう(註7)。

２．中近世墓群の造営主体

先述のように、門前第２遺跡の中近世墓群の造営主体は門前上屋敷遺跡周辺に存在したと推定される集落であったと考えられる。門前上屋敷遺跡は中世前期以降、何回かの再編を伴いながら集落が継続して形成されているが、発掘調査では16世紀以降の具体的な集落の様相は明らかにしえなかった。ただし、集落自体が中世末葉から近世にかけても継続していたのはほぼ確実と思われ、中世前期から14世紀ごろにかけて営まれた有力者層の屋敷地などを含む集落から、今日に続く「農業集落」的な集落へと変化を遂げていったと考えられる。

少なくとも共同墓地の成立した16世紀には門前上屋敷遺跡周辺にこうした集落が形成されていたと言えよう。この集落は、中世末葉に成立しており、近世を通して継続していることから、「近世的」な「村」としてとらえられよう。一般に、近世につながる生産・再生産の単位としての村共同体は14、15世紀以降形成されていったとされており、16世紀末から17世紀初めごろには近世的な支配体制の元に置かれてその完成を見るという（大藤2003・渡辺2004など)。もちろん、地域差なども相当大きかっただろうから、個別に実証する必要があるだろうが、こうした大筋の流れは門前第２遺跡や門前上屋敷遺跡で推察される集落の様相と矛盾はしないと思われる。

このように、門前第２遺跡の中近世墓群の造営主体は、中世前期から続く門前上屋敷遺跡周辺集落が中世末葉に再編されたことで形成された近世的な小村落共同体であったと考えられる。　　（北）

Ⅲ．門前第２遺跡における中世～近代墓副葬品の様相

門前第２遺跡では第４・５章でみたように、中世から近代にかけての墓を188基検出した。これら多様な要素をもつ調査成果の中から、ここでは出土した遺物、とくに被葬者への副葬品と考えられる遺物を中心として、以下に若干の考察を行う。

１．中世墓

中世墓と判断したものは全部で56基あるが、そのうちＦ区検出の墓１については時期的な連続性がないため、ここでは除外する。

【銭貨】

出土遺物の中でもっとも目立つのは銭貨である。確認できた限りでは寛永通寶を含まず、いわゆる渡来銭のみで構成される。そして銭貨出土は25基（45.5%）であり、ほぼ半分の墓にみられることになる。その枚数をみてみると、半数の12基が６枚であった。４枚が３基、５枚が２基あったほかはいずれも１基ずつであり、「６枚」という枚数がかなり意識されていたことが窺える。

つぎにその出土状況についてみていこう。出土した銭貨のほぼすべてが、一部ないしは全部接着した状態であり、底面近くからみつかっている。このうち土壙中央が12例と約半数、中央より北側にあるものは９例と、中央から北側にかけて分布する傾向が強い。埋葬体位が判明しているものが少ないため明確なことはいえないが、墓42や44は頭を北にした臥葬であると考えられること、また本期の土壙形態がA群に位置づけられ、近世以降の同形態土壙からも同様の臥葬人骨が検出されていることから、概ね同様の埋葬肢位を採っていたと判断できよう。つまり銭貨は、頭部から腹部にかけての範囲にあると見なせるであろう。さらにこれらは、積み重なった状態で出土しており、なかには４例だけではあるが、漆器上に置かれたと考えられるものもみつかった。墓３・６・44は中央部、墓46は中央北側の頭蓋骨近くであった。これら以外では検出できなかったが、同様に漆器に載せていたものがほかにあった可能性は十分考えられよう。とくに２群北側（Ｇ３区）の土壙では、銭貨が出土した７基とも底面上に積み置いたかのような様子を呈している。

なお１群（Ｇ５区）では、ａ群１、ｂ群１、ｃ群２基がみられ、その分布は墓域北側の墓に集中している。１・２群ともに見出せるこの傾向は、相互の関連性の強さを示すのかもしれない。

【土器類】

土器類は12基から出土しているが、その状況から大きく土壙上位以上と底面に２分される。このうち７例が１点のみで、複数点数出土するものをやや上回る。

さて、これら土器類の種類には材質および技法から以下の３種がある。すなわち京都系土師器皿３例、回転台成形土師器皿・杯８例、唐津産陶器皿１例である。前二者には１基から複数出土する場合があるが、京都系は京都系、回転台は回転台というように、異なる種が共伴することはない。これが時期差を示すものなのか、葬法によるものかは現状では判断できない。

以上、銭貨と土器類についてみたが、これらの組み合わせとなると、京都系については全て銭貨が伴う。しかし回転台系にはわずか１例しかなく、それも16枚が接着したやや特殊なものであった。このように土師器と銭貨の関係についても、土器形態の違いにより差異が見出せたが、これら土器類が出土したものには、漆器が伴わないということも特徴として挙げられ、こうした供膳具のもつ意味（役割）についても検討していく必要があろう。

２．近世以降の墓

近世以降としたものは132基を数える。これらについてはその墓の形態からＡ～Ｄ類に分類したが、これをもとに各遺物相をみていくこととしよう。

【銭貨】

やはり中世同様、副葬されるものの中でもっとも多いのが銭貨である。その副葬率をみていくと、Ａ類（26例＜68.4％＞）とＢ類（36例＜73.5％＞）の二者が非常に高く、一方Ｃ類（11例＜37.9％＞）、Ｄ類（２例＜22.2％＞）が低いという顕著な差が見て取れる（その他不明２例＜28.6％＞）。またその銭種についてみると、Ａ類では新寛永（文銭以外）と鉄銭を含むものがそれぞれ11基ずつと大半を占める。Ｂ類では鉄銭が20基と多数で、ついで新寛永が12基となる(註8)。Ｃ類では鉄銭を含むものが９基で、銅銭のみで構成されるものは非常に少ない。こうした傾向は、概ねそれぞれの墓の形態が時期的な流れを示しているともいえるであろう。

さてその出土状況をみると、銭貨だけが接着したものと、鋏などと接着したものがある。いずれも布などが付着している例が多く、布にくるまれていたのであろう。とくに後者の場合、頭陀袋に入れて死者の首から提げていた可能性が高い。

また銭貨のなかには、棺材と考えられる木片が接着しているものがみられる。これは墓167のように土壙底面から出土しており、棺直上に積み置かれたものであろう。また木片はないものの、墓158などのように底面中央から出土するものも同様の可能性が考えられよう。こうした例は土壙形態別では、Ａ・Ｃ類では５基ずつ、Ｂ類では１基となっており、深いタイプのものに多い傾向が窺える。

【刃物類】

刃物類としては、鎌と鋏が主なものである。しかしこれらは後述するように出土状況が異なるため、それぞれを分けて検討する。

まず鎌であるが、Ａ類11、Ｂ類19、Ｃ類８、Ｄ類４例と銭貨に次いで各類型から出土している。とくにＢ類において、約50％の比率をもつことは注目されよう。さて、これらの出土地点をみると、

①標石から土壙上面にかけて

②頭蓋骨など人骨上やその周辺といった、底面よりやや浮いたところ

③土壙底面

という３ヶ所に分けられる（表７）。①については、現在でも大山町（旧中山町）樋口の「両墓制」埋葬墓地にある、標石脇に鎌を立てる例（写真）と同様の行為がなされていたと考えられよう。また②についても、土壙上層にあったものが落ち込んできた状態が考えられ、例えば棺の上面に置かれていたということも想像できるのではなかろうか。このように、土壙上層にあったものは出土例の６割弱を占める。しかし一方、底面近くから出土した例が４割強ある。

写真　大山町樋口の「墓上鎌」

表７　土壙形態別にみた副葬状況

	銭貨						煙管	鋏	毛抜	鎌			
	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	小計				上面	頭上など	底面	小計
Ａ類（38基）	3	1	11	11	0	**26**	**6**	**8**	**3**	3	5	3	**11**
Ｂ類（49基）	1	2	12	20	1	**36**	**17**	**14**	**4**	8	2	9	**19**
Ｃ類（29基）	0	1	1	9	0	**11**	**2**	**0**	**0**	1	4	3	**8**
Ｄ類（９基）	0	0	1	1	0	**2**	**2**	**0**	**0**	0	1	3	**4**

このうち人骨より離れた位置から出土したものについては、上からの落ち込みの可能性もあるだろう。しかし、墓171・172のように座葬の大腿骨下から出土するものについては、埋葬前にその位置にあったことはほぼ間違いない。つまり後述する鋏と同様、死者の近くに置いたものと考えられよう。

次に鋏についてみてみる。もっとも特徴的なことは、Ａ類で８例、Ｂ類で14例と鎌とそれほど違いがないほどの出土数ながら、Ｃ・Ｄ類ではＤ類で１例あるのみという点である。Ｃ・Ｄ類はその大半が座葬であるが、鋏が出土したＤ類の１例（墓173）というのは臥葬である。そうした葬法が関係するのであろうか。

なお鋏は布が付着していたり、銭貨と接着していたりする例が多く、銭貨のところでも述べたとおり、頭陀袋に入れて首から提げていたのであろう。

【煙管】

鎌や鋏などの刃物類についで出土量の多いのが煙管である。Ａ類で６、Ｂ類17、Ｃ・Ｄ類は２点ずつとなっており、Ｂ類において出土率が高い。またこれらの被葬者の性別をみると、男性にはＡ類５、Ｂ類９（男性か？というものも１例含む）、Ｃ・Ｄ類各２例となり、Ａ・Ｃ・Ｄ類においてはほぼ男性で占められている。しかしＢ類では女性が６例あること、さらに10歳程度の未成年者へも副葬されていることは注目されよう。こうした若年層への副葬については南部町（旧会見町）田住桶川遺跡においても例（北浦・中森ほか1997）があり、必ずしも普遍的ではないにしろ、煙管副葬への意図が感じられよう。

また、今回の調査で火打金・火打石が確認されたが、確実に副葬品と認められる４例については、いずれも煙管が伴っていた。これなどは、被葬者の生前における愛用品であった可能性も考えられよう。

３．おわりに

以上副葬品を中心として、その様相について概観してきた。全体を通してみると、やはり銭貨がもっとも多いといえよう。それは中世の段階からほぼ一定している。その初期においては銭貨のみだったものが、近世中期になり鋏や煙管が加わってくる。この３点をかつてトラベル・セットとして、死者の旅立ちに際しもたせる共通アイテムと捉えたことがある（中森1997・2004）。本遺跡でもこのセットが10例みられ、またこの３点のうち２点ずつの組み合わせとなると24例ある[註9]ように、ある程度普遍性があるものと捉えられよう。

一方で銭貨については、死者の首から下げる頭陀袋へ入れたものだけでなく、棺底あるいは土壙底面に置かれたと考えられるものが見出せた。中世においてとくに多く、なかには漆器皿へのせたものもあった。近世以降では事例が減るものの土壙の深いタイプにこの例がまとまってみられ、単なる副葬ではなく、土壙を清めるなどの行為があった可能性もあろう。また、同じものであっても違う意味がもたらされていたのは鎌である。その出土状況からは土壙上層にあったものと、死者に近い位置にあったものとの二つに大別できた。

このように、遺物ひとつをとっても複雑な内容をもつ可能性があることがわかった。ただしこうした分析を行なうためには、当然ながら調査時におけるデータをどのようにとっているかが問題となろう。限られた時間のなかで本例を十分分析しえたとは到底いえないが、ひとつの視点は得られたと思っている。これをもとに、今後は他遺跡の事例と比較しながら、考察を深めていきたい。　（中森）

表８　中近世墓出土遺物一覧表（1）

墓番号	土師器	陶磁器	銭貨	銭貨の分類	鎌	鋏	毛抜	煙管	その他	釘	土壙形態	埋葬形態	時期	年齢	性別
墓2			6	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓3	上面(皿1)		6	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓4											その他	臥葬？	Ⅰ		
墓5											A	臥葬？	Ⅰ		
墓6			6(＋上層1)	Ⅰ					漆器？		A	臥葬？	Ⅰ		
墓7											その他	臥葬？	Ⅰ		
墓8			6	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓9											A?	臥葬？	Ⅰ		
墓10	下部(杯2)										A	臥葬？	Ⅰ		
墓11											A	臥葬？	Ⅰ		
墓12			6	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓13	上面？・上層(杯3・火鉢1)	上面？	16	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓14	上面(皿2？)・底面(皿1)		6	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓15									和紙		A	臥葬？	Ⅰ		
墓16			10	Ⅰ？							A	臥葬？	Ⅰ		
墓17											A	臥葬？	Ⅰ		
墓18	中位(杯1)										A	臥葬？	Ⅰ		
墓19			9	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓20											A	臥葬？	Ⅰ		
墓21											A	臥葬？	Ⅰ		
墓22	上面(杯1)										A	臥葬？	Ⅰ		
墓23			6	Ⅰ					櫛		A	臥葬？	Ⅰ		
墓24			4	Ⅰ					漆器？		A	臥葬？	Ⅰ		
墓25		上面？									A	臥葬？	Ⅰ		
墓26	底面(杯2)										A?	臥葬？	Ⅰ		
墓27			8	Ⅰ							その他	臥葬？	Ⅰ		
墓28			4	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓29											A	臥葬？	Ⅰ		
墓30			11	Ⅰ	○						A	臥葬？	Ⅰ		
墓31			あり	？							A	臥葬？	Ⅰ		
墓32											A?	臥葬？	Ⅰ		
墓33											B	臥葬？	Ⅰ		
墓34			5	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓35											A?	臥葬？	Ⅰ		
墓36			22	Ⅰ							B？	臥葬？	Ⅰ		
墓37			4	Ⅰ							A	臥葬？	Ⅰ		
墓38											A	臥葬？	Ⅰ		
墓39											AorB	臥葬？	Ⅰ		
墓40											その他	臥葬？	Ⅰ		
墓41											AorB	臥葬？	Ⅰ		
墓42			6	Ⅰ							AorB	臥葬？	Ⅰ		
墓43			6	Ⅰ						2	AorB	臥葬？	Ⅰ		
墓44			6	Ⅰ					漆器？	28	AorB	臥葬？	Ⅰ		
墓45			6	Ⅰ						33	AorB	臥葬	Ⅰ		
墓46			6	Ⅰ					漆器？	29	AorB	臥葬	Ⅰ		
墓47	底面(皿1)		5	Ⅰ						8	AorB	臥葬？	Ⅰ		
墓48											AorB	臥葬？	Ⅰ		
墓49	底面(皿3)		12	Ⅰ						3	A	臥葬	Ⅰ	成人	不詳
墓50	底面(杯1)										A?	臥葬？	Ⅰ		
墓51											A	臥葬？	Ⅰ		
墓52											その他	臥葬？	Ⅰ		
墓53					○						A	臥葬	Ⅲ？	壮年ー熟年	女
墓54			4	Ⅴ							A	臥葬	Ⅲ	壮年後半	女
墓55			2	Ⅲ	○	○	○		数珠玉		A	臥葬	Ⅲ？	青年ー壮年前半	女
墓56		上層	5	Ⅲ以降		△		△：Ⅴ			A	臥葬	Ⅲ	青年	女
墓57			6	Ⅳ						2	A	臥葬	Ⅲ	壮年	女
墓58			4	Ⅴ					鉄製品		A	臥葬	Ⅲ	壮年後半ー熟年	男
墓59			6(＋上層5)	Ⅴ							A	臥葬	Ⅲ	熟年	男？
墓60			4	Ⅴ							A	臥葬	Ⅲ	熟年ー老年	女
墓61			3	Ⅳ					櫛	2	A	座葬	Ⅲ	熟年ー老年	男
墓62											A		Ⅲ		
墓63		上面	6	Ⅴ		○		○：Ⅴ		6	A	座葬	Ⅲ	壮年	男
墓64			1(混入)	Ⅴ						2	A		Ⅲ	壮年	女
墓65			1(上層)	Ⅲ							A		ⅡorⅢ		
墓66	上面		15	Ⅴ	上面			混入：Ⅴ		6	A	座葬	ⅢorⅣ	熟年	女
墓67			12	Ⅳ	○		○		刀子	21	A		Ⅱ？	壮年前半	女
墓68										1	A	臥葬	Ⅳ	壮年	男
墓69					○						A		ⅡorⅢ		
墓70			6	Ⅴ						14	A	臥葬	Ⅲ	壮年後半ー熟年	女
墓71			8	Ⅳ	○					1	A	臥葬	Ⅲ	壮年後半ー熟年	女？
墓72			3	Ⅱ							A	臥葬	Ⅱ？	壮年後半ー熟年	女
墓73			1(混入？)	Ⅱ				△：Ⅵ	火打金	1	A	臥葬	Ⅳ	熟年	男
墓74			7	Ⅴ		○		○：Ⅴ	数珠玉		A	臥葬	Ⅲ	壮年	男

表８　中近世墓出土遺物一覧表（2）

墓番号	土師器	陶磁器	銭貨	銭貨の分類	鎌	鋏	毛抜	煙管	その他	釘	土壙形態	埋葬形態	時期	年齢	性別
墓75			6	Ⅴ						1	A	臥葬	Ⅲ	熟年	女
墓76										9	A		ⅡorⅢ	成人	不詳
墓77			5	Ⅴ						14	A	臥葬	Ⅲ	成人	女？
墓78			6	Ⅴ	上層	○					A	臥葬	Ⅲ	壮年	不詳
墓79			1	Ⅱ							A	臥葬	Ⅲ	壮年後半～熟年	不詳
墓80			37	Ⅳ	○	○	○		数珠玉	40	A	臥葬	Ⅱ？	熟年	男
墓81		上層									A		Ⅲ	成人	不詳
墓82	上層		12	Ⅳ	上層・底面				毛髪		A	座葬	Ⅲ	熟年	女
墓83											A		ⅡorⅢ		
墓84			10	Ⅳ		○				1	A	臥葬	Ⅲ	壮年	男
墓85			4	Ⅲ						7	A	座葬	Ⅲ	壮年後半～熟年前半	男
墓86		上面	1(混入)	Ⅳ							A		Ⅲ	壮年～熟年	男
墓87											A		Ⅲ以前		
墓88		上面	6	Ⅳ	上面	○		○：Ⅴ～Ⅵ	櫛	1	A	臥葬	Ⅲ	熟年	男
墓89		上面	6	Ⅳ							A		ⅡorⅢ	不詳	不詳
墓90			2	？	○			○：Ⅴ	火打金		A	臥葬	Ⅲ	熟年	男
墓91		下部									A		Ⅰ	壮年	女？
墓92			2(＋上層3)	Ⅴ							B		Ⅲ		
墓93			6	Ⅲ以降	○	○					B		Ⅲ	成人	男？
墓94			6	Ⅴ	○			○：Ⅴ			B	臥葬	Ⅲ	壮年後半	男
墓95			6	Ⅴ	○	○					B	臥葬	Ⅲ	壮年	女
墓96					○			△：Ⅴ			B		Ⅲ		
墓97					○			○：Ⅴ			B	臥葬	Ⅲ	成人	女
墓98		上面	9	Ⅴ	上面	○		○：Ⅴ		13	B	臥葬	Ⅲ	壮年後半～熟年前半	女
墓99					△		△	△：Ⅴ			B	臥葬	Ⅲ	壮年	女
墓100											B		Ⅲ以前		
墓101			8(＋上層2)	Ⅳ						1	B		Ⅲ？	成人	男？
墓102	上面	上面	1	Ⅱ				○：Ⅴ新		3	B	臥葬	Ⅲ	熟年	男
墓103			2	Ⅲ以降	上面					6	B	臥葬	Ⅲ	熟年	男
墓104			11	Ⅴ				△：？		3	B	臥葬	Ⅲ	壮年	男
墓105			11	Ⅴ		○		○：Ⅴ	櫛	1	B	臥葬	Ⅲ	10才程度	不詳
墓106									火打金(混)	1	B		Ⅲ	2体(熟年、成人)	女2
墓107			7	Ⅴ	上面			○：Ⅴ		1	B	臥葬	Ⅲ	壮年後半～熟年	男
墓108			4	Ⅳ	○			○：Ⅴ		16	B	臥葬	Ⅲ	壮年後半～熟年	女
墓109											B	臥葬	Ⅲ？	壮年	女
墓110											B		Ⅲ？		
墓111		底面	10	Ⅳ	○						B		Ⅱ？	壮年	不詳
墓112			7	Ⅳ			○	○：Ⅴ		18	B	臥葬	Ⅲ	熟年	男
墓113											B		Ⅲ？	成人	不詳
墓114			7	Ⅳ		○		○：Ⅴ	包丁	4	B		Ⅲ		
墓115	上面		6	Ⅴ	○					1	B	臥葬	Ⅲ	壮年	女
墓116						△				1	B	臥葬	Ⅲ	熟年	男
墓117			8	Ⅳ	○						B	臥葬	Ⅲ	成人	不詳
墓118			4	Ⅴ	上面					2	B	臥葬	Ⅲ	壮年後半～熟年	男
墓119											B		Ⅲ？		
墓120		上層	1(混入？)	Ⅱ	○						B	臥葬	Ⅲ？	壮年～熟年前半	男
墓121			6	Ⅴ		○				2	B	臥葬	Ⅲ	壮年後半～熟年	男
墓122			6	Ⅴ		○			櫛		B	臥葬	Ⅲ	熟年	女
墓123			7	Ⅴ		○		△：Ⅴ	数珠玉		B	臥葬	Ⅲ	熟年～老年	男
墓124			10(＋上層1)	Ⅴ		○	○		数珠玉	4	B		Ⅲ		
墓125											B		Ⅲ？	成人	女？
墓126											B		？		
墓127			5	近代		○			懐中時計・体温計他	92(洋)	B	臥葬	Ⅳ	老年	女
墓128			17	Ⅳ	上面						B		Ⅲ	成人	不詳
墓129		上面	18	Ⅴ		○	○	○：Ⅴ～Ⅵ	刀子		B	臥葬	Ⅲ	熟年～老年	女？
墓130		上面	6	Ⅴ	○	△				1	B	臥葬	Ⅲ	壮年後半～熟年	女
墓131			6	Ⅳ				○：Ⅳ～Ⅴ		3	B	臥葬	Ⅲ	熟年～老年	女
墓132			5	Ⅳ	○			○：Ⅴ			B	臥葬	Ⅲ	成人	男
墓133		上面	5	Ⅴ						3	B	臥葬	Ⅲ	壮年後半～熟年	男？
墓134			6	Ⅳ				○：Ⅴ～Ⅵ		4	B	臥葬	Ⅲ	熟年	男？
墓135			4	Ⅴ		○	○			30	B	臥葬	Ⅲ	熟年	男
墓136	上面		1	Ⅳ		△					B	臥葬	Ⅲ	壮年	女
墓137			5	Ⅴ					櫛		B	臥葬	Ⅲ	熟年	男
墓138								○：Ⅴ	火打金・石		B	臥葬	Ⅲ	老年	男
墓139			6(＋上層1)	Ⅴ	○						B	臥葬	Ⅲ	壮年	女
墓140			5	Ⅴ							B	臥葬	Ⅲ	成人	女
墓141			6	Ⅳ		○					B	臥葬	Ⅲ	壮年	男
墓142			5	Ⅳ						12	C	座葬	Ⅳ	壮年	女
墓143			8	Ⅴ		上層			鉄鍋・漆器・玉	4	C	座葬	Ⅳ	壮年	女
墓144		上面			上面				コハゼ	18(洋)	C	座葬	Ⅳ	熟年～老年	女

表８　中近世墓出土遺物一覧表（3）

墓番号	土師器	陶磁器	銭貨	銭貨の分類	鎌	鋏	毛抜	煙管	その他	釘	土壙形態	埋葬形態	時期	年齢	性別
墓145			6(＋混入)	Ⅴ						5	C	座葬	Ⅳ	壮年後半ー熟年前半	男
墓146			4(＋上層5)	Ⅴ	○					36	C	座葬	Ⅳ	壮年後半	男
墓147					○					2	C	座葬	Ⅳ	壮年後半ー熟年	女
墓148			4(上層)	Ⅴ	○				かんざし		C	座葬	Ⅳ	壮年	女
墓149			1(混入)	?							C	座葬	Ⅳ	熟年	女
墓150			6	Ⅴ						13	C	座葬	Ⅳ	熟年	男
墓151					○					16	C	座葬	Ⅳ	熟年	男
墓152			6	Ⅴ	○					17	C	座葬	Ⅳ	熟年	男
墓153			6(＋混入6)	Ⅲ以降	○					6	C	座葬	Ⅳ	熟年ー老年	男
墓154											?		Ⅳ以前	12才程度	女
墓155											C	座葬	Ⅳ	壮年	女
墓156		上層	6	Ⅴ				△:Ⅴ		4	C		Ⅲ	壮年	不詳
墓157					○					1	C?		Ⅲ	成人	不詳
墓158			6(＋上層1)	Ⅴ		△		○:Ⅴ		2	C	座葬	Ⅳ	壮年後半ー熟年	男
墓159	下部										C	座葬	Ⅳ	壮年	女
墓160			1(混入)	Ⅳ						30(洋)	C	座葬	Ⅳ	熟年	男
墓161											C?		Ⅳ?	壮年ー熟年	女
墓162										20(洋)	C	座葬	Ⅳ	壮年	男
墓163											C		Ⅳ?		
墓164		上層									C	座葬	Ⅳ	壮年	女?
墓165			3(混入)	Ⅱ				混入:Ⅵ		34(洋)	C	座葬	Ⅳ	壮年後半	女
墓166		上面						○:Ⅵ		15	C	座葬	Ⅳ	壮年後半	男
墓167			5	Ⅴ							C	座葬?	Ⅳ	熟年	男
墓168		上層	6	Ⅴ						3	C	座葬	Ⅳ	壮年後半ー熟年	女
墓169	上面		上層4(混入)	Ⅳ							C	座葬	Ⅳ	壮年後半ー熟年	男
墓170		上層									C小型		Ⅳ		
墓171		上面			○				刀子		D	臥葬?	?	壮年	女
墓172					○					5	D	座葬	Ⅳ	熟年	男
墓173			6(＋混入1)	Ⅴ	○	○		○:Ⅴ	火打金・数珠玉		D	臥葬	Ⅲ	成人	男?
墓174										5	D		Ⅲ以前		
墓175					○			○:Ⅵ		76(洋)	D	座葬	Ⅳ	壮年後半ー熟年	男
墓176		△	3	?						2	D	座葬	Ⅳ	壮年ー熟年	不詳
墓177											D	座葬	Ⅳ	壮年後半ー熟年前半	男
墓178		上面									D小型		?		
墓179											D小型		?		
墓180											?		ⅡorⅢ		
墓182			2(上層)	Ⅳ							?		ⅡorⅢ		
墓183									漆器?		?		ⅡorⅢ	熟年ー老年	女
墓184			3(＋上層6)	Ⅳ						3	?		ⅡorⅢ	成人	男
墓185											?		ⅡorⅢ	成人	女
墓186			6	Ⅱ以降							?		ⅡorⅢ	壮年後半ー熟年	男?
墓187											AorB	臥葬	Ⅰ	壮年ー熟年	不詳
墓188	底面(Ⅲ1)										AorB	臥葬?	Ⅰ		

凡　例

○:出土あり
△:破片が出土したもの(煙管の場合は雁首か吸口一方のみ出土の場合)。混入の可能性が高い
「上面」・「上層」:墓の上面、上層で出土したものがある場合。

時期については本文参照
Ⅰ:16世紀～17世紀前葉　　Ⅲ:18世紀中葉～後葉
Ⅱ:17世紀中葉～18世紀前葉　　Ⅳ:19世紀代以降

土器・陶磁器は出土位置を示した。
供献、副葬、混入それぞれの場合を含む。

その他には副葬品と考えられる主なものを記載した。

銭貨の分類は鈴木公雄(1988ほか)による六道銭の分類
Ⅰ:渡来銭のみ　　Ⅳ:最新銭が新寛永(文銭除く)
Ⅱ:最新銭が古寛永　Ⅴ:最新銭が鉄銭
Ⅲ:最新銭が文銭

煙管のローマ数字は古泉編年(古泉1983)
Ⅳ:18c前半
Ⅴ:18c後半　　(Ⅰ～Ⅲは出土なし)
Ⅵ:19c

註

（１）最も一般的な土壙を覆うように多数の礫が組まれた標石や、墓151のように土壙の中心と四隅を押さえるように礫が配置されるものなどからは、土壙の上を「封じる」という意図を読み取れないだろうか。

（２）後述する「両墓制」墓地の埋葬地上にしばしば置かれる自然石が民俗語彙では「メアテイシ」などと呼ばれているが（坂田1995）、この名称はその意味が変容した結果を端的に示していると考えられる。なお、近隣に見られる「両墓制」埋葬墓地では現在は実際に自然石を石塔風に樹立したりして、文字通り標石として機能している場合も多い。

（３）「両墓制」とは民俗学用語で、「死体を埋葬する墓地とは別の場所に石塔を立てる墓地を設ける墓制」（新谷・関沢編2005）を指す。現在でも民俗事象として「両墓制」墓地が鳥取県中・西部に多く分布しており、大山町域にも現行例が確認されている（坂田1995）。これらは、墓域の構成のされ方にいくつかのパターンが見られ、埋葬墓の形態にも様々なバリエーションがあるが（坂田1995）、旧名和町西高田や旧大山町鈑戸などは、本遺跡例とよく類似した礫集積を伴う埋葬墓が用いられている。なお、この「両墓制」概念には多くの問題点が指摘されており（岩田2003・2006、新谷2003など）、その用語の放棄を意図した議論もある（岩田2006）。こうした議論は非常に説得力があり、今後こうした方向で研究が進展することは間違いないだろうが、民俗学に不案内な筆者にはこの問題を整理する能力はないため、ここでは説明に便利な「両墓制」の用語を使うこととする。

（４）本来ならば墓地ごとにすべての石塔について形式、銘文の一覧を作るべきであっただろうが、時間的な制約もありはたせなかった。また、近隣地域墓地の石塔についても同様の調査をすることが望ましいと思われるが、これも行えなかった。ただし、近隣地域の墓地を概観する限り、遺跡周辺墓地の石塔の様相と大きな違いはないようである。

（５）単に集落付近に建立されたと推定したが、それが実際にはどういった単位でどのような形態の「石塔墓地」を形成していたかの追及はきわめて重要となろう。ただし、それを明らかにしうる資料は現状では見出せない。

（６）同じ丘陵上にもう一箇所「ステバカ」があるので、そこにはこの時期の墓があるのかもしれない。

（７）石塔がそれまでの墓制に後出的に付け加わるということは、石塔普及開始期には程度の差はあってもほとんどの墓地が両墓的景観を形成していたといえよう。実際、大和地域では発掘調査事例などからこれが明らかにされている（白石2004）。そうであるなら、「両墓制」成立の問題は石塔普及初期にあるのではなく、石塔が普及した後に石塔と埋葬地をどのように再構成したかが問題になると思われる。こうした意味で、門前第２遺跡でのあり方は非常に興味深いものといえるが、石塔墓地の形成のされ方が実際には全く不明なため、Ⅲ期の埋葬地再編にもそこまでの意味をもたせられるか問題が残ろう。

（８）ただしＡ群で１、Ｂ群で３基は新寛永を含む銅銭のみで構成されながら鉄銭をもつ墓を切っており、鉄銭がなくても時期的に下るものがあることを示している。

（９）先述のように鎌についても意味合いが違うものがあり、鋏同様に死者への副葬とあれば、この数はさらに増える。

【引用参考文献】

岩田重則2003『墓の民俗学』，吉川弘文館

岩田重則2006『お墓の誕生』，岩波書店

大藤 修2003『近世村人のライフサイクル』，山川出版社

北浦弘人・中森 祥ほか1997『小町石橋ノ上遺跡・朝金第２遺跡・田住桶川遺跡・田住第８遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書52

坂田友宏1995『神・鬼・墓 －因幡・伯耆の民俗学的研究－』，米子今井書店

白石太一郎2004「中・近世の大和における墓地景観の変遷とその意味」『国立歴史民俗博物館研究報告』112，国立歴史民俗博物館

新谷尚紀1991『両墓制と他界観』，吉川弘文館

新谷尚紀2004「村落社会と社寺と墓地」『国立歴史民俗博物館研究報告』112，国立歴史民俗博物館

新谷尚紀・関沢まゆみ編2005『民俗学小事典 死と葬送』，吉川弘文館

杉谷愛象ほか1984『陰田』，米子市教育委員会

中森 祥1997「田住桶川遺跡における近世墓の様相」『小町石橋ノ上遺跡・朝金第２遺跡・田住桶川遺跡・田住第８遺跡』

中森 祥2004「山陰における近世墓出土の銭貨」『山陰の出土銭貨』

牧本哲雄･家塚英司･野口良也･玉木秀幸ほか2007『門前上屋敷遺跡Ⅱ・門前鎮守山城跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書17

森本倫弘編2005『門前上屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書105，（財）鳥取県教育文化財団

三宅博士・金山尚志・永見英1998『清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』，安来市教育委員会

柳浦俊一・勝部智明ほか2006『松才遺跡 真野谷Ⅱ遺跡 半坂古墓群 宮ノ前遺跡 正源寺遺跡 面白谷遺跡』，島根県教育委員会

渡辺尚志2004「村の世界」『日本史講座５ 近世の形成』，東京大学出版会

第２節　門前第２遺跡の変遷と周辺遺跡

門前第２遺跡（菖蒲田地区）は２度の調査によって縄文時代から近世に至る遺構、遺物を確認できた。時代の順を追って、本遺跡の変遷と関連する周辺遺跡の展開をまとめておこう。

＜縄文時代＞

前回の調査ではＡ・Ｂ区で縄文時代早期の配石群が検出され、大きな成果を見た。今回の調査では、ピット数基と少量の遺物の確認のみにとどまっている。近隣にはこの時期の遺構や遺物がまとまって確認された遺跡はみられないが、こうした遺構が存在する以上、周辺地域に活動の中心をもった集団が居住していたと考えられよう。

今回の調査では縄文後期に帰属する可能性が高い土坑がＧ区を中心に十数基確認できた。前回調査では谷部（Ｃ・Ｄ区）から貯蔵穴と考えられる土坑が谷筋に沿って見つかったほか、谷縁辺からは落し穴と考えられる土坑が見つかっている。Ｇ区の土坑は落し穴と考えられるものが中心となっており、その立地も前回調査と同様、谷縁辺部に並ぶ。こうした立地上の特徴からは、谷部に近づく狩猟対象獣を狙って落し穴をつくっていた様子が窺えよう。本遺跡の東の中位段丘上に位置する門前上屋敷遺跡でもこの時期の土坑や遺物が確認されたほか、名和川対岸の沖積地に位置する名和飛田遺跡でも遺物が出土している。また、ここから1.2㎞ほど名和川を下ると福田Ｋ２式期の住居跡の検出された南川遺跡があるなど、名和川下流域でのこの時期の活動の痕跡は濃い。

＜弥生時代～古代＞

弥生時代から古代にかけても遺跡利用は断続的に続けられる。そのうち、遺構が形成される時期は弥生時代中期後葉、弥生時代終末～古墳時代初頭、古墳時代中期～後期である。

弥生時代中期後葉の遺構はピットのみであるが、遺物が比較的まとまっている。調査地内で確認できたものの内容は貧弱であるが、調査地外にも遺構が形成されている可能性が高い。この時期には隣接する門前上屋敷遺跡や名和飛田遺跡で小集落が形成されているので、これらとも緊密な関係をもって活動領域が形成されていたと考えられよう。

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけては、今回調査では遺物が出土したのみであるが、前回調査の成果から集落が形成されていたことが明らかになっている。なお、前回調査で確認された門前１号墓は明確な時期決定を行えるような遺物が出土せず、今回調査で関連する遺物・遺構の発見が期待されたものの、これに応えられるような資料は確認できなかった。

古墳時代中期から後期かけては、集落が形成されていたことが前回調査で判明しており、今回の調査でもこの時期の可能性が高い区画溝やピットを確認している。区画溝は調査地の南側に延びているため、さらに集落が広がっている可能性が考えられよう。

＜中世前期＞

今回の調査で、丘陵上のＧ区からは道路状遺構や掘立柱建物が検出され、Ｆ区からは造成面と墓や土坑が検出された。前回調査では谷部を中心に、水田耕作の痕跡とみられる耕作痕などが検出されている。これらの遺構群は時期が判明したものの大半が12世紀代を中心としており、それぞれ関連をもって展開していた可能性が高い。道路状遺構は地形の変換部に沿って丘陵を横断するようにつくられており、これを挟んで南の丘陵平坦面上に掘立柱建物が、北側の谷部には耕作地が見られることから、遺跡内の地形に合わせて土地を使い分けていたことが分かる。

中世の遺跡形成において、本遺跡と極めて強い関連をもつと考えられる門前上屋敷遺跡とその後背丘陵の門前鎮守山城跡では、11世紀末ごろから12世紀代にかけて、大規模な区画溝を伴う有力者層の居住域（屋敷地）と小鍛冶を行う工業生産域を含む集落が形成されたと想定されており、これ以降14世紀ごろにかけてその内容を充実させながら継続していると考えられている。本遺跡で確認された耕作地はこうした居住域と対応する農業生産域のひとつと考えられよう。また、Ｆ区検出の造成面や墓がこの居住域と対応する墓域となる可能性もあるが、確実に墓と評価できるものは１基のみで積極的には評価しづらい。掘立柱建物の見られた丘陵部は門前上屋敷遺跡周辺の集落居住域から派生した居住域の可能性が考えられよう。また、道路状遺構はさらに丘陵の東の谷へと続いていたことも考えられるので、門前上屋敷遺跡などの中心的な居住域と本遺跡をつないでいた可能性もあろう。

このように中世前期には隣接する門前第２遺跡、門前鎮守山城跡、門前上屋敷遺跡それぞれが密接な関連性をもちながら展開していたと考えられる。

＜中世後期～近世＞

中世後期には前回調査の丘陵北東部で機能不明の大型の溝や土坑などがつくられている。その他の地区では遺構は確認できていないものの、大半は耕作地としての利用が継続していたと推測できよう。中世前期と同じく、この時期の遺跡のあり方も門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡と関連していた可能性が高いだろう。門前上屋敷遺跡では、中世前期に形成されていた屋敷地が15世紀には耕作地に変化している。その後、15世紀代のうちにこの耕作地を埋め立てるなどして大規模な造成を行い、寺院に関連する可能性が高いとされる建物を築いている。また、門前鎮守山城跡ではこの時期に堀切、土塁が構築され、砦として機能しうる状態にあったと考えられている。これらの特殊な遺構群以外にも、門前上屋敷遺跡周辺に集落居住域が存在した可能性が高いので、基本的には門前第２遺跡と門前上屋敷遺跡・門前鎮守山城跡の関係は前段階と大きくは変わらないだろう。

中世末期から近世、近代にかけては門前第２遺跡の丘陵西縁部に墓群が形成される。前節で詳述した通り、この中近世墓群は、門前上屋敷遺跡周辺に存在したと推測される小村落共同体によって営まれた共同墓地であったと考えられる。墓域以外では、前段階までと同じく耕作地としての利用が行われていたと考えられる。

このように、中世前期以降、門前第２遺跡は、門前上屋敷遺跡周辺の集落中心域から機能分化した領域として利用されてきたといえる。こうした集落領域の構造は中世から近世にいたるまで大きくは変化しないようであるが、その中心となる門前上屋敷遺跡の集落の構成には何段階かの変遷が認められている。居住集団の性格にどれほどの変化があったかについては不明な点が多いが、いずれにしても、中世以降同一の領域を生活の根拠とし続けた集団がこの地域に存在していたと言えよう。

【参考文献】

北浩明・三木雅子・日置智2005『名和飛田遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書104,（財）鳥取県教育文化財団

森本倫弘編2005『門前上屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書105,（財）鳥取県教育文化財団

中森祥・浜田真人・湯川善一2005『門前第２遺跡（菖蒲田地区）』鳥取県教育文化財団調査報告書106,（財）鳥取県教育文化財団

牧本哲雄･家塚英司･野口良也･玉木秀幸ほか2007『門前上屋敷遺跡Ⅱ・門前鎮守山城跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書17,鳥取県埋蔵文化財センター